

絵画表現領域の拡大と教育分野におけるその可能性Ⅱ

加藤 修

教育学部美術科

Expansion of the area of painting expression and the possibility in the educational field

KATO Osamu

Faculty of Education, Chiba University, Japan

キーワード：絵画表現 (painting expression) 美術教育 (art education) 現代美術 (contemporary art)
ワークショップ (workshop) アートコミュニケーション (art communication)

I 現代美術と美術教育

1. 現代美術と美術教育を見据えた大学院授業の一事例

1) 「絵画表現研究A1」での事例

授業目標は、少ない経験領域の中で「制作」に関する自己のスタイルをコンパクトにまとめず、広範囲な領域から自己表現の手段を見出す方法論を受講者に体験してもらうことを目標に以下の授業展開を考案した。

授業名は「絵画表現研究」で、2004年前期は絵画におけるベーシックな表現テクニック、たとえば「コラージュ」「シェイプト」「マチエル」など複数の選択肢のなかから、本人達が1つを自由に選択し、その定義や表現の可能性について個人の見解を構築することを課題とした。後期は絵画表現の構成要素である「点」「線」「面」について日常を観察させ、写真撮影することからはじまり、客体化された写真を見ながら、各人の作品制作における「点」「線」「面」の扱い、またはその定義を各自が再認識する方向に導いた。

しかし今年度はさらに、私がガイドライン的要素(「コラージュ」「シェイプト」「マチエル」「点」「線」「面」など)を提示することなく、本人に内在する関心事を萌芽し明確化させ、造形表現に結び付けることを目指した。そのため、まず日常を観察するところからはじまり、その写真撮影することを課題の入り口とした。路上観察して関心を持ったものを24枚の写真にし、共通項を見つながらグループ化していく。その後、特に明確なコンセプトを感じるものを3つ選び、それぞれ4週間使いながら、自分に関心を持たせた理由を様々な角度から考察し、その思考経路をレポート化し、提出作品の途中経過、実験作品などを発表しながら、授業受講者全員でディベートする。完成した提出作品やそこに至る過程での技術向上だけを重視するのではなく、自己のイメージやコンセプトを作品化する発想法や思考システム、それを裏付ける取材・実験制作を授業内の重要な柱とした。それにより、テーマに対する提出作品の質を高めるばかりか、自己の作品制作全般に関する価値基準までも明確化することを期待することができるのである。

〔課題導入〕

- ① 「皆さんが日常気になっている箇所を24枚取りフィルム1本に撮影してきて下さい。」
 - ② 「各自が撮影してきた写真を4～5つのグループに分けなさい。」
 - ③ 「それぞれの分類の基点を述べなさい。」
 - ④ 「4～5つに分類したグループのなかから3つを選択し、実験制作と併行しながら探究しなさい。」
(選択した1つの内容に対して4週間で完結させる)
(4週目の授業でレポートと完成作品を提出)
- 〈参考例：大学院生 高橋さやかさんの場合〉
路上観察して関心を持ったものを24枚のプリントにしたものを分類すると下記ようになった。
- ① 「向こうの世界」(状況の観点から)
 - ② 「コンクリート」(素材の性質・印象の観点から)
 - ③ 「色彩の印象とフェイク」(形体と色彩の観点から)

〈本人のレポートから〉高橋さやか・1

絵画表現演習 A I

04CM0704 高橋 さやか

課題：路上観察して、気になるところを24枚プリントしてくる。

研究テーマ①

☆ 向こうの世界（状況の観点から）

自分の存在する世界と向こうに感じる非日常世界。

二つの世界の間にあるもの



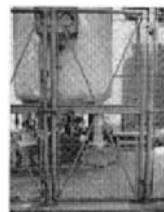
窓ガラス



水溜り



高い塚



金網の扉

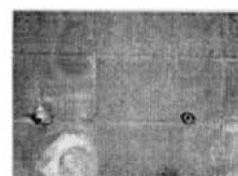


有刺鉄線

研究テーマ②

☆ コンクリート（素材の性質の観点から）

すばやく（？）固まる。 → 「現代を化石化する」



研究テーマ③

☆ 植物（形体、色彩の観点から）



24枚の写真から3つのグループを抽出する

高橋さやか・2

2005. 5. 2

絵画表現演習 A I

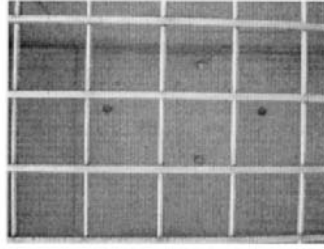
04CM0704 高橋 さやか

課題：研究テーマ①を設定する。

研究テーマ①：向こうの世界（状況の観点から）



池



危険物入れ



ガードレール

観察写真の共通点：自分の存在する世界と向こうの非日常世界とを仕切るもの
内側に特別なものを感じる。

⇒ 自分の存在する世界と向こうに感じる非日常世界を表現する。

作品計画：☆2層の画面を持つパネルを用いる。1層目の図と2層目の図が融合して見える作品。（奥の層を覗き込むような作品形体にしたい。）

手前の層・・・使用する基底材は布。

映像で表現。（映像の内容は、日常生活と内面世界を表すもの）

・1分～2分程度。

・i m o v i eで編集。

奥の層・・・使用する基底材はベニア板。

描く。（深層心理を表すもの）

テーマ① 「向こうの世界」

本人にとってのテーマの意味の確認・整理と視覚的具現化の試行

高橋さやか・3

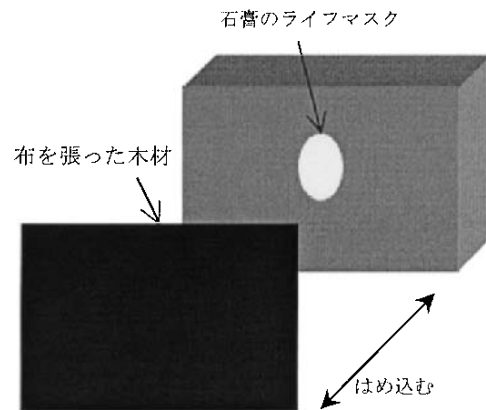
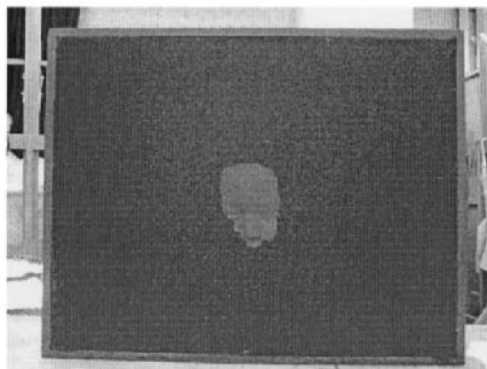
2005、5、23

絵画表現演習A1

04CM0704 高橋 さやか

研究テーマ①：向こうの世界（状況の観点から）

自分の存在する世界と向こうに感じる非日常世界を表現



<材料・準備品>

ベニア板、木材（パルサ？）、黒の布（接着芯）、石膏、ペンキ（白）、ジェッソ（黒）、木工ボンド、デジタルビデオカメラ、DVC、プロジェクター

<作品について>

- ・ 2層構造のパネル（実際はボックス型）を使用。
- ・ 手前の層は透ける素材の黒布を張り、プロジェクターで映像を映す。
奥の層にはライフマスクを中央に配置。
- ・ 手前の層に映し出された映像と、奥の層に透けた映像、二重の映像の効果とライフマスクの融合を試みた。

<考察>

- ・ 黒背景の中に白抜きの言葉の場面を映像に取り入れたが、黒のパネルに映し出され二重に浮かび上がった白い文字が効果的であった。
- ・ 映像は色を使うところと使わないところを計画的に分けることで、シンプルで率直的な作品に近づいたと感じる。

テーマ① 「向こうの世界」

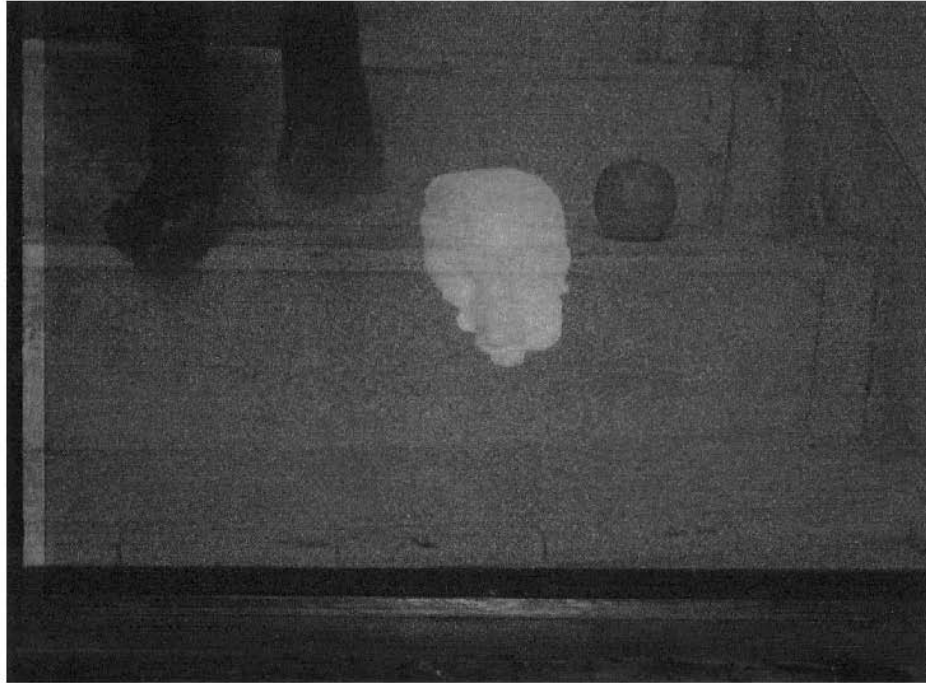
視覚的具現化における材料選定と表出方法

高橋さやか・4

絵画表現研究AⅠ

04CM0704 高橋 さやか

研究テーマ①：向こうの世界



テーマ① 「向こうの世界」
完成作品写真

捕足：作品は、黒い細かいメッシュ系の布をボックス型のオブジェの正面にスクリーン状に張ったものにビデオ映像を映し出す形態をとっているため、静止写真では全容は伝えづらい。

実際に映像を流した状態においては、本人が描いていた表裏一体の存在としての日常と非日常が、非常に的確な方法によって表現されていた。

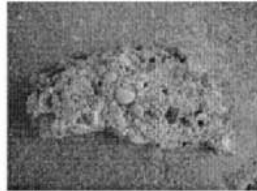
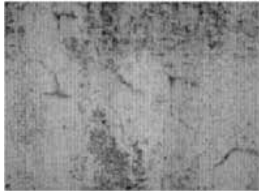
高橋さやか・5

絵画表現演習 A I

04CM0704 高橋 さやか

課題：研究テーマ②を設定する。

研究テーマ②：コンクリート（素材の性質の観点から、印象の観点から）



コンクリートの性質：固まる、強固（ビル、高速道路）

コンクリートから受ける印象：その時を残す、時間が止まる（廃墟、朽ちている様子から）

生活が染み込む（鏽、落書き、水道跡）

人が存在していた（人工物）

冷たい（灰色、硬い、機械的、直線、無機質）

作品計画①：コンクリートそのものを作品に使う（コンクリートを素材として使う）

作品計画②：コンクリートの持つ印象から作品を制作する。（コンセプチュアル的）

テーマ② 「コンクリート」

素材の性質がもたらす印象・主張と制作者本人の深淵に潜在する根源的制作テーマとの接点の確認作業

高橋さやか・6

絵画表現研究A I

04CM0704 高橋 さやか

研究テーマ②：石化するもの（素材の性質の観点から、印象の観点から）

石化する素材の持つ「時間」の魅力・・・その強固な素材は現代社会のいたるところに存

→ コンクリート、モルタル、石膏 在する。道路や建物、塀

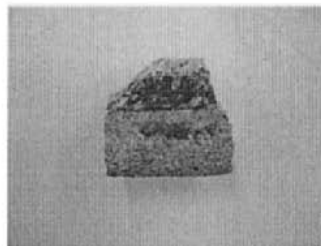
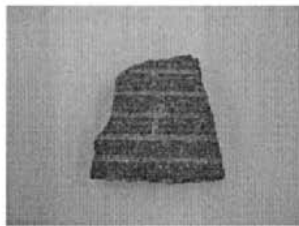
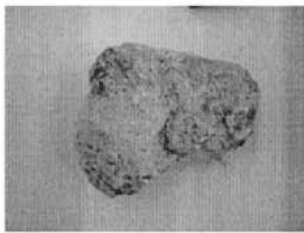
当時の目的と時間を同時に内在している。

人工の石たちを採集し、作品化する。

しかし、そのような素材も風にさらされ、雨にさらされることで、脆く儂いものであることを皮肉をこめて作品化する。（＝現代社会の危機）

作品について

- ・ 標本箱をイメージする箱（よりリアルなものに仕上げる。）
- ・ 中に、生活の周辺のコンクリートの破片等を収集し入れる。
- ・ さらに現代社会を象徴するもの（携帯電話、CD）を化石化させたものを入れる。



テーマ② 「コンクリート」

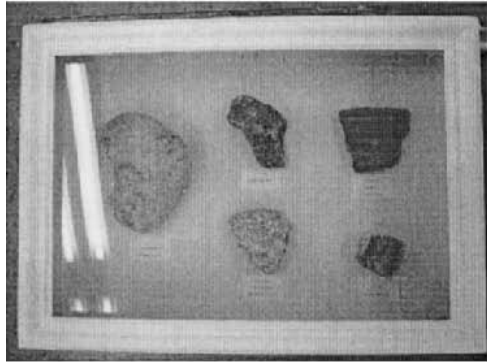
本人の深淵に潜在する根源的制作テーマと今回のテーマとの関係性の整理・試行

高橋さやか・7

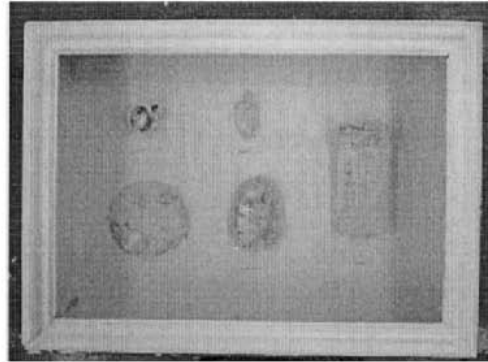
絵画表現研究 AⅡ

04CM0704 高橋さやか

研究テーマ②：石化するもの（素材の性質の観点から、印象の観点から）



22XX①



22XX②

〈材料〉

ベニア板、額材、コンクリートパネル、石、コンクリート、モルタル、砂（細、粗）
銅粉、ペンキ（白）、パテ、CD、瓶、携帯電話、LED、デジタルカメラ部品、
木Tボンド、塩化ビニール、

〈作品について〉

- ・ 石化する素材の持つ「時間」の魅力を作品に生かす。
- ・ 一見強固であるそれらの素材であるが、風にさらされ、雨にさらされることで脆く儂いものになってしまう。現代に存在する科学、技術も将来はそのような存在になってしまうのではないだろうか。「破壊の技術」とも呼ばれる現代の技術の目覚ましい発展を石化する素材で覆うことで、虚しさを表現した。
- ・ 22XX②の方の作品では、現代社会において多くの人々が必要とし、身近なものとなっているものを選んだ。

テーマ② 「コンクリート」

視覚的具現化における材料選定と表出方法

高橋さやか・8

絵画表現演習 A I

04CM0704 高橋 さやか

テーマ②：石化するもの



テーマ② 「コンクリート」
完成作品写真
タイトル「石化するもの」

ることをこの段階では求めていないので単色で塗ることを勧める。命名は単語でも文章のでも構わないが、本人が日常を振り返り、記憶や感情を重ねたオリジナルの内容になっていることが重要である。さらに、彼らの深層にある潜在的な心理が表出する可能性も予想される。各自が体験に基づく色彩の命名をして、その色彩名や命名の理由について発表することによって、それを聞いた共通の体験を持つ児童・生徒は、その感動を共有し、安心と自信を得ることができる。さらに彼らは連鎖してより深い記憶にまで到達することができる。

心理的に開放する方向に向かったことは、ワークショップ後のアンケート・KJQの検査でも得られた。今回のワークショップでは、発表のかたちでコミュニケーションをとることが重要で、それが可能であったが、保健室登校児を対象とした場面では容易ではないことは予想に容易く、さらに適切な方法を選ぶことが必要となるだろう。しかし「色を塗る」という作業や、本人が自己を取り巻く広範囲な日常を振り返る行為についてだけでも、それらが、治癒的能力を持っていることは十分に予想されるので、現在さらに具体的なデータを収集している。

〈児童・生徒から出た色彩名の事例〉

●感情を表したもの

「カオスブラック」「怒られた時の色」

●日常の物品・生き物等から連想したもの

「火燐色」「ガーコのくちばし色」

●時間・季節を含むもの

「秋の夕焼け色」「夜の空色」

●限定された体験の記憶からのもの

「富士色」「海色」「近海の実地色」

「キャベツの収穫色」

*細分化された色彩の名前

「マリモ色」「芝色」「枝豆色」「雑草色」「ささ色」

「竹林色」「ほうれん草色」「サボテン色」など

⇒どれも緑系だが、非常に的確に実際の色を捉えて名前をつけている。彼らは体験のなかにある歴大な緑色のファイルから、猛烈な速さでしかも的確に一枚のページを選びだす作業をしていることになる。

Ⅲ 私の作品例

1. 平面性の高いユニット的作品

私は絵画の定義を「平面性の高いオブジェ」としているが、今回はその表現方法の様々な要素を最大限削ぎ落とし、残された要素に関しても極めてシンプルなスタイルで形体化した。

額に入れずに展示空間にそのまま配置することによ

て、鑑賞者と同一の時間軸、空間的ラグのない状況を得て、作品の緊張感が展示空間に共鳴しながら拡散していくことが望ましい展示方法と考えているが、今回、敢えて曲面を持たない、直方体の形体にすることで、その緊張感の度合いを高めることに成功したように考えられる。作品は連作とし、展示も互いの関係性を感じさせられる距離感でインスタレーションした。

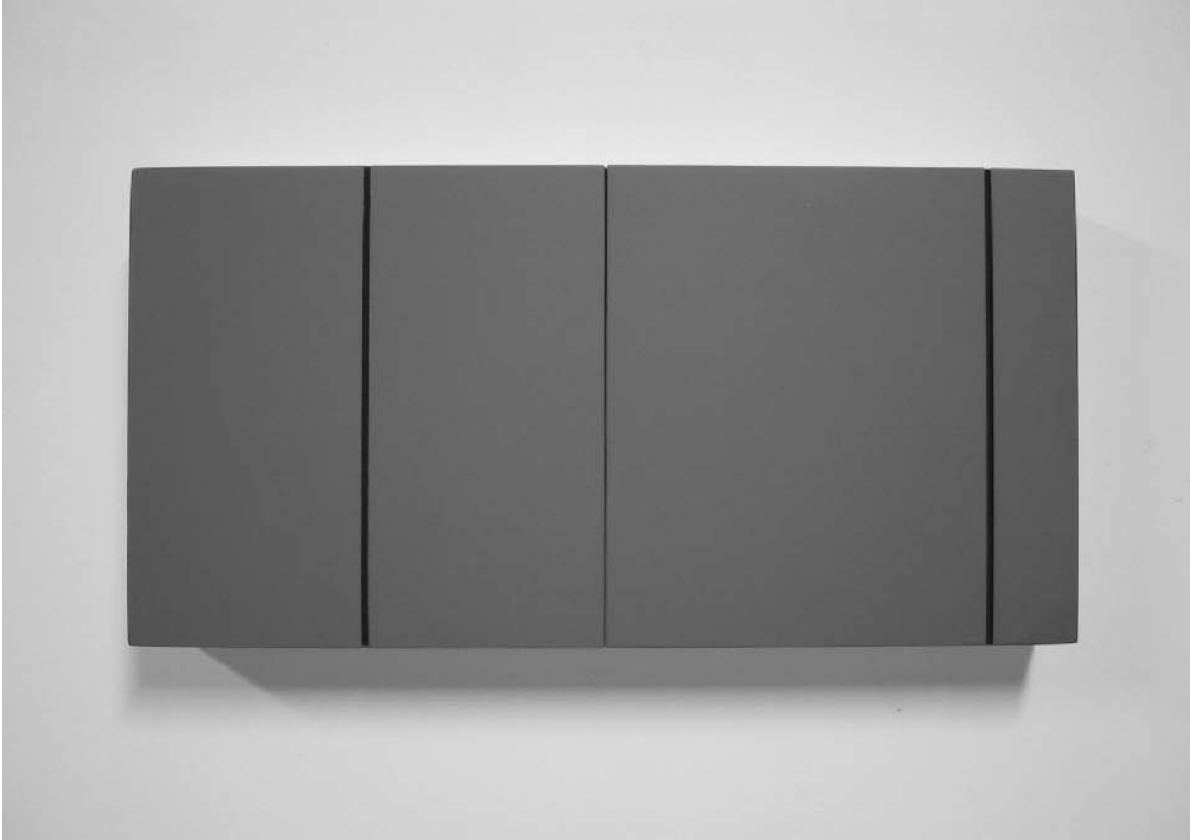
ひとつの作品についてももう少し詳しく説明すると、構造は壁側と前面の2層になっており、壁側の層はつや消しの白、前面の層はオリーブグリーンとし、極めてフラットに着色した。前面は2つの正方形のタイル状のものから成り立っている。タイル上には機械的に黒色のラインを一本彫りこんでいるが、その位置は、1方の正方形は1:1(中心)に、もう1方は2:7に分割する位置とした。そのため、その2種類を使用するという条件下では、その「順列」は、16通りとなった。今回はそのなかから5点を展示した。連作の関わりは、数学でいうところの「場合の数」の「順列」のような展開となっており、作品における「思い」といった柔らかな感情の隙間を極力排除し、コンセプトを前面に呈するものとした。

コンセプトはタイトルそのものにもなっているコンポジションであるが、一般的にそのタイトルが使われる作品の範疇においても極めてタイトなアプローチができたと考えられる。

2. 3タイプの視覚的要素を配置した作品

本来絵画が、自己表現・自己主張の一形態として視覚芸術分野に存在するのだと認識するならば、正面観賞性に裏付けられたイリュージョンのみに頼るのではなく、自己の主張を明確化し、実存化させることにその意義の大半があるように考えられる。そのためこの作品は、作品内に3タイプの視覚的要素を配置するというスタイルとした。作品の構造は壁側と前面の2層になっており、壁側の層は半光沢のライトグレー、前面の層は、3タイプ4種類のパーツから成り立っている。1つはパネル上に活字(英単語)がレリーフ状になったつや消し黒のダイレクトなメッセージパネル、もう1つはシンボリックなオブジェで、本来絶対的価値を有するものが埋没するあり様として、枯れた樹木を標本箱に配し、標本箱とともに風化していく状態を作った。さらにもう1つのタイプは自己の感情を印象的に伝える方法としての色彩パネルである。今回は2種類のパネルを配置した。1方は油彩によるマチエルを伴った深紅のもの、もう1方は金箔を平滑に全面に貼り詰めたものである。金箔は弱酸で酸化させ、変化しづらい代表的金属の光沢を失わせた。3タイプ4つのパネルは、それぞれの得意とする伝達能力でメッセージをリアルに伝達している。

1. 平面性の高いユニット的作品



「COMPOSITION (LINE)」

変形パネル (18.0×36.0×4.5cm)

アクリル絵具

2. 3タイプの視覚的要素を配置した作品



「COMPOSITION (heterogeneous)」

変形パネル (31.0×91.0×7.0cm)

油彩・アクリル絵具・金箔・自然木・石膏